

る海青牌と認めたのは如何なる理由に據るか詳らかでないけれども、箭内博士が紋様化されたる虎頭と認めたものを、Gerfalcon の紋様化されたものと考へたのか、もしくは前記兩側の鳥の模様によつてかく認めたかの何れかに外ならぬであらう。もし後の場合であるとすれば、上部中央に刻出せられた著大の模様には拘はらないで、僅かに補助的の模様過ぎない鳥の形によつてかく認めようとするのは承認し難いし、前の場合であるとすれば、これを Gerfalcon の紋様化されたものとは認め難いやうである。更にまた海青牌と稱するものは後に説くやうに、必ず圓牌でなければならぬから、何れの點からしても氏の見解には従ふことは出来ない。^⑤

現存する蒙古の牌札中、今日までに余がその形を知ることを得たのは以上の三種に過ぎない。^⑥ラウフラー氏の言ふところに據ると、前記一と全く同様の刻文のある銀牌が一八五三年トランスバイカル州ウエルフネ・ウディンスク區のニュクスク村から發見され、今レーニングラードのエルミタージュ博物館に保存されて居り、別にトムスク州マリンスク區ボギルスク縣から、鑄鐵の牌に、鍍銀した八思巴文字で、“Durch die Kraft des ewigen Him-
mels: wer den Befehlen des Khans nicht gehorcht, der soll getötet werden!”^⑦といふ義を蒙古語で記したものが發見されて居る。ユールが前記一と同様の刻文のあるものがなほ一面東部シベリヤから出たというて居るのは思ふにこのニュクスク村から發見されたものを指したのに外ならぬ。これらの兩牌はラウフラー氏の示して居る通り、前者はサベリヨフ (Saveljev) 氏、後者はポズドネーエフ (Pozdnejev) 氏によりてその研究が發表されて居るのであるが、余は今直ちにこれを見得ないから、こゝにはこの紹介だけに止めて置かねばならぬ。尙ほウラヂミールツォフ (Vladimirtzov) 氏に據ると、アブヅラ金黨汗の銀牌の外に、同じ金黨汗 Toktoga, Özbek 兩汗の銀